

実態調査 歴史意識に関する学習能力の実態

— 今昔の相違がわかる能力について —

足利市立富田小学校 社会科研究部

(岩田 昭, 岩田澄子, 春山善三郎, 小沢 隆)

<はじめに>

本校は、昭和47年度職員研修の1つに、「実態に即した歴史的意識を育てる指導 — 主として今昔の相違を中心にして —」を研究テーマにして研修を積み重ねてみた。

その内容は、学習指導要領に示された歴史的内容の検討、歴史意識の発達への検討、歴史意識に関する学習能力の実態調査とその考察、研究単位による学習指導法とその考察などであるが、ここでは、「歴史意識に関する学習能力の実態」を報告するものである。

今昔の相違がわかる能力とは、生活様式をはじめとしてすべての社会的事象が、昔と今では違っていることを理解する能力のことである。そして、歴史意識のうちでは初発的な意識といわれている。この調査は、昭和28年に発表された「歴史意識の研究」(信濃教育会研究所)を参考にしたものである。

1. 調査の方針・実態の生かし方

歴史意識の研究の方法を借用し、追跡調査をする。その結果については、カイ自乗検定を導入して判定考察し、信濃の研究結果と対比したりして、本校の歴史学習の改善に役立てる。

2. 調査の対象・時期

歴史的意識の学年的発達への傾向を調べることから、各学年とも知能の発達が中位にある児童を対象とする必要がある。

- 1年～6年 (各学年計30名)
- 各学年とも知能偏差値50を中心にして上位下位同数ずつ選び、男女各15名選出する。
- 47年7月上旬に調査する。

3. 調査の目的・方法

今の乗り物と昔の乗り物を対置し、その相違がわかり、相違する事実をどのような面に対比できるか、さらに、それらはどのような発達への傾向を示すかを明らかにする。

その方法としては、今の乗り物(バス・電車)と昔の乗り物(かご・馬)の絵を見せながら、「どちらも乗り物ですね……これは(昔の方をさす)いつの乗り物ですか……昔の乗り物と今の乗り物は同じですか……ちがいますね……どんなことがちがいますか」と質問していく。形象の相違を意味するような「どんなところ……」という質問をさけたり、あいまいな応答に限り、「どんなことが便利か」とか「それはどういうことですか」と説明を求める。すべて面接法である。

4. 今昔の相違がわかる能力についての学年別反応

第1表 今昔の相違がわかる。

昭47 7調査

学年		(例)	一	二	三	四	五	六
不可能 (含無解答)			人 3 100%	0	0	0	0	0
			0	0	0	0	0	0
可 能	漠然と	○こちらはバスだ、こちらはかごだ。 ○昔はかごや馬だ、今はバス・電車だ。	8 266	4 133	3 100	2 66	1 33	0
	形や状態のみで	○今の乗り物は車・ドア・屋根・ハンドルがあって、電気(ガソリン)で動く。	8 266	2 66	2 66	2 66	3 100	0
	性能の面まで	○今の乗り物は昔の乗り物よりたくさんの人や荷物を乗せることができ、しかも、速く、遠くまでいける。	9 300	20 666	22 733	22 733	19 633	14 464
	社会生活上の意味で	○今の乗り物は誰れでも乗れるが、昔の乗り物は大名(侍)しか乗れなかった。	2 66	4 133	3 100	4 133	7 233	16 536

※ 信濃教育会研究所の結果は下記の通り (昭27 6 ~ 7調査)

学年		(例)	一	二	三	四	五	六
不可能 (含無解答)			人 4 100%	0	0	0	0	0
			0	0	0	0	0	0
可 能	漠然と	○こちらはバスだ、こちらは馬にのっている。	6 150	5 125	1 25	0	0	0
	形や状態のみで	○かごは人がかついでいくが、汽車は石炭で動く。	23 575	19 475	17 425	7 175	5 125	0
	性能の面まで	○汽車はかごより速いし、たくさん乗れる。	7 175	15 375	20 500	24 600	22 550	21 525
	社会生活上の意味で	○昔はえらい人でなければ乗れなかった今は誰れでも乗れる。	0 0	1 25	2 50	9 225	13 325	19 475

5 今昔の相違がわかる —— 類型による学年別応答事例 ——

第1学年

- 漠然 ○ こちらはバスだ、こちらはかご。
○ 今の乗り物は人を車に乗せて運転して
いく。昔の乗り物は人をかごや馬に乗
せて歩いていく。

- 形状態 ○ 今の乗り物は屋根・車・ドア・ハ
ンドルがあって、電気（ガソリン）を
使って動く。昔の乗り物は車・ドア・
ハンドルがなくて人がかついで歩く。

- 性能 ○ 今の乗り物は人がいっぱい乗れる
が昔の乗り物は1人しか乗れない。

社会的な意味

- 今の乗り物はどこに行くのか、佐
野行、浅草行と書いてあるので行く
先がわかる。昔の乗り物はわからな
い。

第3学年

- 漠然 ○ 今の乗り物は車や電車で、昔の乗
り物はかごや馬だ。

- 形状態 ○ 今の乗り物はエンジンで動く。昔
の乗り物は人の力で動く。

- 性能 ○ 今の乗り物は昔の乗り物よりたく
さんの人や荷物を乗せることができ
しかも速い。

社会的な意味

- 今の乗り物は～行と書いてあって行き
先がきめられている。みんなの乗り物だ
から国でお金を出してつくった。
昔の乗り物は～行きと書いてなく、行

第2学年

- 漠然 ○ 1年生と同じ。

- 形状態 ○ 今の乗り物は車・パンタグラフが
ある。昔の乗り物にはない。

- 性能 ○ 今の乗り物は昔の乗り物よりたく
さんの人や荷物を乗せることができ
しかも速くいける。

社会的な意味

- 今の乗り物は切符を買って、きまった
ところ（停留所）で乗り、きまったところ
を通って行き、きまったところで降りる。
昔の乗り物は、切符は買わないが、好き
なところで乗り、好きなところを通って
行き、好きなところで降りる。

第4学年

- 漠然 ○ 3年生と同じ。

- 形状態 ○ 今の乗り物はエンジンや機械で動
かすが、昔の乗り物は人がかついだ
り引っぱったりした。

- 性能 ○ 今の乗り物は昔の乗り物よりたく
さんの人や荷物を乗せることができ、
しかも速く遠くまで行くことができる。

社会的な意味

- 今の乗り物は昔の乗り物に比べて、時
間や停車場所（停留所・駅）が決まっ
ている。
○ 今は交通事故が起こるが、昔はなかっ

き先はきめられてない。かごは個人でつくった。

第5学年

漠然 ○ 今の乗り物は、人や荷物をバスや電車で運ぶが、昔は人がかついだり馬が引いたりした。

形状態 ○ 今の乗り物は屋根・車があって、ガソリンや電気で動くが、昔の乗り物には屋根・車がなくて、人や動物で動かした。

性能 ○ 4年生と同じ。

社会的な意味

- 今の乗り物はどんな人でも自由に乘れるが、昔の乗り物はえらい人（武士・お金持ち）しか乘れない。
- 昔は大水のとて、川を渡ることができないので宿屋で休んでいたが、今はいくら雨が降っても危険はないから、いつでも行ける。
- 昔は旅の途中で病気になるると連絡に困ったが、今は電話などで連絡できるので安心して旅ができる。

たと思う。

第6学年

漠然 ○ なし

形状態 ○ なし

性能 ○ 4年生と同じ。

社会的な意味

- 今の乗り物は誰れでも乘れるが、昔の乗り物は大名や武士しか乘れなかった。
- 今は会社などの連絡を受けながら動かしっている。
- 今の乗り物は所定の路線で、所定の時刻に走る。
- 今の乗り物は交通事故を起こし社会問題だ。
- 今の乗り物は排気ガスを出し、空気をよごし自然をこわす。
- 今の乗り物は免許証で運転する。
- 今の乗り物は速く遠くまで行けるので短期間で用（目的）がはたせるので、旅が楽になった。

6 度数の差の有意性の検定と考察

(1) 本校における学年間の度数の差の有意性の検定と考察

ねらい 1 今昔の相違がわかる能力のうち、形や状態の面のみで比較できる能力は、学年間に差が認められるかどうかを、カイ自乗の検定により調べる。

第2表 形や形態のみでとらえた応答状況

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
人数	19 *	26	27	28	29	30
百分率	63%	87	90	93	97	100

(注) *は隣接学年間でカイ自乗検定(2×2分割法)により、5%の水準で有意差が認められたもの。また、***は0.1%の水準で有意差が認められたものを示す。カイ自乗検定の方法については、社会科教材研究シリーズ第24号(低)P20を参照されたい。

検定1 第1学年と第2学年の差

帰無仮説「形や状態の面のみで比較できる能力は1年と2年に差はない」を立て、 χ^2 検定でこの隣接学年間に差があるかどうかを調べる。このとき、四分割表にて次の式にあてはめて計算する。

	比較できる	比較できない	計
1年	19(a)	11(c)	30(a+c)
2年	26(b)	4(d)	30(b+d)
計	45(a+b)	15(c+d)	60(N)

$$\chi^2 = \frac{N(ad-bc)^2}{(a+b)(c+d)(a+c)(b+d)}$$

$$\chi_0^2 = \frac{70(19 \times 4 - 26 \times 11)^2}{45 \times 15 \times 30 \times 30} \div 4.856$$

自由度は $2 - 1 = 1$ である。 χ^2 分布表から自由度1のとき、5%でその棄却点は3841。したがって、 $\chi^2 \geq 3841$ 。ゆえにこの χ^2 は5%の水準で有意といえる。

よって、形や状態の面のみで比較できる能力は、1年と2年に有意差があるといえる。

検定2 第2学年と第3学年の差は認められない。 検定は略

検定3 第2学年と第5学年の差は認められない。 検定は略

第2表でみると、形や状態の面で比較できるものが1年生で63%を示し、かなり比較できる段階に達していると言えよう。2年生では、形や状態の面で比較できるものは87%を示し、比較できる段階に達している。また、 χ^2 検定の結果、1年と2年の学年間に有意性のあることがわかり、1年から2年になるときに今昔の相違する事実を形や状態で比較する能力が高まることわかる。

学年別の応答事例からもわかるように、1年では、昔と今の乗り物を個々に説明するというよりも、乗り物の具象的(形状態)な違いに眼をつけて比較できてきている。この実態をふまえて、1年では、誕生から入学までの生活の変化、家庭生活にみられる季節によるくらしの違い、身近な環境の近所の様子の違いなどの学習を通して、さらに、今昔の相違する事実を形や状態からとらえさせる手だてをほどこせば、より、この能力を高めることができよう。

ねらい 2 今昔の相違がわかる能力のうち、性能の面まで比較できる能力は、学年間に差が認められるかどうかを、カイ自乗の検定により調べる。

第3表 性能の面までとらえた応答状況

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
人数	11 *	24	25	26	26	30
百分率	37%	80	83	87	87	100

第3表でみると、性能の面で比較できるものが1年生で37%を示し、比較できはじめる段階に達していると言えよう。2年生では、性能の面で比較できるものは80%を示し、比較できる段階に達している。また、 χ^2 検定の結果、

1年と2年の学年間に有意差のあることがわかり、1年から2年になるときに、今昔の相違する事実を性能の面で比較する能力が高まることわかる。

乗り物の相違を性能の面から比較できるといっても、1年生では運搬量のみにとどまり、2年生になって、運搬量と速度の二つの視点からとらえられてくる。それが、4年生になると、運搬量・速度、輸送距離の三点からとらえられるようになる。ところで、歴史学習では衣食住や施設などの場合の今昔の対比は、少なくとも、それらの持つ性能の面までできなければ学習の対象にはなり得ないと言われている。この調査では、2年生からそれが可能であるわけなので、できる限り、いろいろなものについて今昔の対比を性能の面について学習させて、経験を豊富にさせたい。

ねらい 3 今昔の相違がわかる能力のうち、社会生活上での意味で比較できる能力は、学年間に差が認められるかどうかを、カイ自乗の検定により調べる。

第4表 社会生活上の意味までとらえた
応答状況

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
人数	2	4	3	4	7	16
百分率	7%	13	10	13	23	54

第4表でみると、社会生活上の意味で比較できるものが5年生で23%を示し、やや比較できはじめる段階に達しているといえよう。6年では、社会生活上の意味で比較できるものは、

54%を示し、比較できる段階に達している。また、 χ^2 検定の結果、5年と6年の学年間に有意差のあることがわかり、5年から6年になるときに今昔の相違する事実を社会生活上の意味で比較する能力が高まることがわかる。

昔の乗り物に比べて今の乗り物を、4年生では公共的なものとして、5年生では安全で大衆化されたものとしてとらえているが、それが、6年生になると、交通事故や排気ガスによる公害などの社会問題からも考えられるようになる(学年別応答事例参照)。このように、高学年になるに従って、乗り物を一つの社会の機能としてみるができるようになるので、5年時の産業学習、6年の政治学習では、効果的な手だてをして、広い視点から社会事象の意味を考えさせていきたい。

(2) 本校と信濃の学年間の度数の差の有意性の検定と考察

ねらい 4 今昔の相違がわかる能力のうち、形や状態のみで比較できる能力は、本校の実態と信濃の実態との間に差が認められるかどうかを、カイ自乗の検定により調べる

第5表 形や状態の面のみでとらえた本校と信濃の応答状況

		1年	2年	3年	4年	5年	6年
本校	人数	19	26	27	28	29	30
	百分率	63%	87	90	93	97	100
信濃	人数	30	35	39	40	40	40
	百分率	75%	88	98	100	100	100

第5表でみると、形や状態の面で比較できるものが1年生で本校では63%、信濃では75%を示し、いずれも比較できる段階に達しているといえよう。また、 χ^2 検定の結果、どの学年間にも有意差は認められず、まったく本校の実態と信濃の実態

とが一致していることがわかった。

しかし、応答事例から質的に比べてみると、信濃の実態では今と昔の乗り物を個々に説明している程度であるが、本校では乗り物の具象的な違いに眼をつけて比較している。このことから、質的には本校のほうが高いといえよう。

ねらい 5 今昔の相違がわかる能力のうち、性能の面まで比較できる能力は、本校の実態と信濃の実態との間に差が認められるかどうかを、カイ自乗検定により調べる。

第6表 性能の面までとらえた本校と信濃の応答状況

		1年	2年	3年	4年	5年	6年
本校	人数	11人	24	25	26	26	30
	百分率	37%	80	88	87	87	100
信濃	人数	7人	***	*	33	35	40
	百分率	18%	40	55	82	88	100

第6表でみると、性能の面で比較できるものが1年生で本校では37%を示し、比較できない段階に達しているが、信濃ではその段階に達していない。2年生で本校では80%を示し比較できる段階に達しているが、信濃では40%を示し、ようや

く比較できない段階に達している。比較できる段階に達するには4年生になってからである。 χ^2 検定の結果、本校と信濃の第2学年の間と第3学年の間に有意差のあることがわかり、信濃より本校のほうが優れているといえる。

下学年に有意差があることはどういうことであろうか。その一つには、児童をとりまく車社会という環境によるものと考えられる。そこで、各家庭における車(四輪車以上)の保有率を調べたところ、287世帯のうち179世帯が保有家庭で、その率62%と、三軒に二軒の割合で四輪車以上の車を持っていることがわかった。このようなことは、生活と車が密着したものであることを物語り、下学年における優劣となって現われたものと思う。信濃が実施したときから、すでに20年も過ぎた現在、その間の社会の変容は車<交通機関>だけではない。ラジオからテレビへ、そろばんから電算機へ、木炭から石油、電気へなど、生活のあらゆる面にみられる。このような環境の中で、今の子どもたちは、20年前とは比べものにならない程の豊富な経験の違いは、やがて知識の違いとなり、それが、下学年における優劣の差を生じたものと思われる。

ねらい 6 今昔の相違がわかる能力のうち、社会生活上の意味で比較できる能力は、本校の実態と信濃の実態との間に差が認められるかどうかを、カイ自乗の検定により調べる。

第7表でみると、今昔の相違する事実を社会生活上の意味で比較できるものが5年生で、本校では23%を示し、やや比較できない段階に達している。これは信濃の33%と同じ傾向を示す。6年生で本校では54%を示し、かなり比較できる段階に達している。これも信濃の6年生48%

第7表 社会生活上の意味でとらえた本校と信濃の応答状況

		1年	2年	3年	4年	5年	6年
本校	人数	2人	4	3	4	7	16
	百分率	7%	13	10	13	23	54
信濃	人数	0人	1	2	9	13	19
	百分率	0%	3	5	23	33	48

と同じ傾向である。また、 χ^2 検定の結果、どの学年間にも有意差は認められず、全く、本校の実態と信濃の実態とが一致していることがわかった。

それにしても、5年からやや比較できはじめるということは、社会生活上の意味が考えられる知識が増してきたからなのだろう

うか。具体的な個々のものに即して社会生活とのかかわりにおいて考えられる経験が豊かになったからであろうか。もしそうだとするならば、具体的には、産業学習における生産様式の新旧の対比政治・産業・文化などの今昔の相違などを意図的に取り上げ、社会生活とのかかわりから比較する学習を進めていきたいものである。

7 まとめ

この実態調査は、本校の児童の歴史意識を高めるための足がかりをつかもうとして実施したものである。一口に歴史意識といっても、その規定はむずかしいので、学習指導要領の根底となっていると言われていた齋藤博氏の研究成果（「歴史意識の発達」信濃教育会研究所 昭和28年）を借用して行なうことにした。しかし、齋藤博氏の分析した歴史意識のすべてを調査することはとうてい不可能なことなので、このうち、最も初発的な歴史意識と言われていた「今昔の相違がわかる能力」のみについて計画を立て、実施し、集計考察を加えてきた。

ところで、「今昔の相違がわかる能力」とはどのような能力なのであろうか。それは、生活様式をはじめとして、すべての社会事象は今と昔とを比べると万事につけて違っていることがわかり、相違する事実を比較できる能力であると言える。今と昔の比較ができる能力と言ってもよい。そしてこの能力は、ただ漠然と今と昔がわかることから、相違する事実を形や状態の面だけで比較できるようになり、性能の面まで比較できるようになり、社会生活にとっての意味まで比較できる能力まで高められていくと言われていた。はたして、このように継起的に発達していくものであろうか。これらのことが、本校ではどうなっているのかを知るために、できるだけ忠実に信濃の研究成果を追試した結果、次のことがわかった。

(1) 低学年では、今昔の相違する事実を形や状態の面で比較できる能力が培われること。

入学3か月後（調査実施7月）の1年生でも、形や状態の面でかなり比較できるようになっている。しかし、今昔の対比ができない者が10%、ただ漠然と対比している者が27%もいることから考えると、1年生では形や状態の面で比較できるように指導したいものである。

(2) 中学年では、今昔の相違する事実を性能の面まで比較できる能力が培われること

3年と4年の学年間の差は認められなかったが、両学年とも比較できるようになる。この性能の

面まで比較できる能力は、すでに1年生から比較できはじめるようになり、2年生になると1年との有意差がみられるようになり、これが中学年になると、それをうわまわるようになることがわかった。この性能の面での比較できる能力を質的に調べてみると、1年では運搬量、2年、3年では運搬量と速度、4年になると、運搬量、速度、輸送距離というように完成されていくことがわかる。これらのことから、中学生になると質的な見方が高まるといえるので、性能の面での比較を質的にふやすような指導をすることが可能であると思う。

(3) 高学年では、今昔の相違する事実を社会生活上の意味で比較できる能力が培われること

この社会生活上の意味で比較できる能力は、今昔の相違する事実を比較できる能力のうち、最も高いものである。本校でも信濃でも、5年生になってからこの能力が培われる。この能力を高めるためには、今昔の相違する事実を性能の面まで比較できるようにしておかなければならない。そこで、高学年では中学年の積み重ねを受けて、さらに性能の面からの指導を強め、意図的に、社会生活上の意味で比較できる能力を引き伸ばすようにしていきたい。

〈あとがき〉

この実態調査の後に、次の研究単元を設けて能力の育成にとり組んでみた。その結果についてものせたかったが、紙面の都合により後日に譲ることにしたい。

	研 究 単 元
1 年	うちのひとのせわ（おかあさんのしごと）うちのくらしとおかね（ともだちのおとうさんのしごと）きせつとくらし（家のくらしのくふう）
4 年	気候のちがいと人々のくふう（塩沢町ふきん）土地のちがいと人々のくらし（台地のくらし）那須野が原の開拓（那須そ水づくり）
6 年	武士が力をもってきた世の中（農村のようす）士農工商の世の中（開国）近代日本の出発（全国に小学校を）

最後になりましたが、この実態調査を報告できますことは、茂呂保雄先生（足利市立教育研究所）山崎政三先生（足利市教育委員会学校教育課）鈴木義雄先生（宇大付小教諭）のご指導によるところが多かったです。深く感謝申し上げます。

評

歴史に関する学習をたしかなものとして成立させるためには、歴史的な見方や考え方を育てるための具体的な手だてを明らかにしておかなくてはならないはずである。このことについて斎藤 博氏〈信濃会教育研究所〉は「歴史意識の発達」の中で「それにはまず、歴史的な考え方はどんな層構造を持っているか……」を明らかにする必要があるとし、「歴史意識は① 今昔の相異がわかること、② 変遷（発達）がわかること ③ 歴史的因果関係がとらえられること、④ 時代構造がわかること、⑤ 歴史の発展がわかることの五つの層構造を持ち、児童・生徒の発達に応じて順々に芽生えてくるであろう」と報告している。

本校がこの点に着目され、児童の歴史意識に関する実態調査にとりくまれたことは、まことに卓見であり、特に、その研究手順として① 学習指導要領に示された歴史的内容の検討、② 歴史意識の発達の検討、③ 実態調査 ④ 研究単元の設定と学習指導法 ⑤ 考察という段階を着実にふまれたことが本調査を単なる調査のための調査ではなく明日の学習指導法の改善に直結するものになっていることを特筆したい。